

□10月27日主日礼拝説教短縮版(隅野徹牧師)

「神の国を求めて生きる」(ルカ12:29～34)

31節から後でイエスは、それまで語られた「あなたがたは父なる神を信じることで思い悩みから解放されるのだ」ということに加えて、ある大切なことを語られます。思い悩みから解放されて神の国を求めて生きるとは、具体的にどのようなことなのか。それが33、34節に示されています。自分の持ち物を売り払って貧しい人々に施すことによって、盗まれることも、虫に食われることもない天に富を積むことだと教えられています。

自分の持つものや蓄えているもので自分の命と体を養ったり、装う必要はもうない。父なる神様が私たちの命と体を養い装って下さるのだから、もう自分が持っているものに縛られるのではない。文脈からこの言葉が、このような意味で語られていることが迫ってくるのではないのでしょうか。

そして大切なのは、ここでは施しをしなければならないという義務が語られているのではないということです。神があなたに与えてくださっているものを、あなたはもっと自由に用いることができるのだ、という勧めがなされているのです。自分のためよりも、神のみ心がこの世で実現されるために献げていくことができる。互いに愛し合い、励まし合い、支え合う。神の御国なるために、自分の命が用いられる。そんな生き方が教えられているのです。

人生を養い装うのは自分自身だと思っているならば、その人は自分により頼んでいる。つまり富を自分に積もうとしていて、その心は地上にあって天にはないのです。一方で神の国を求めて生きることは、父なる神様が自分の命と体を養い装って下さることを信じてより頼むことですが、それは自分の命だけを見るのではなく神の国全体を見つめること、神が創造され養われている一つ一つの命を見つめて生きることなのです。

大切なのは神が創造された世界全体を愛し、受け入れていくことです。そうするならば、心が地上ではなく天に向くことが増えます。思い悩みや不安から解放される瞬間も増えます。そして何より自己実現の貪欲から自由になって、自分に与えられているものを他者のために用いていくことができる、新しい歩みが与えられるのです。(終)